

にしふたばちょう
西二葉町遺跡 (本発掘調査B)

所在地 名古屋市東区白壁 2 丁目32番 6 号
(北緯35度18分34秒 東経136度90分95秒)

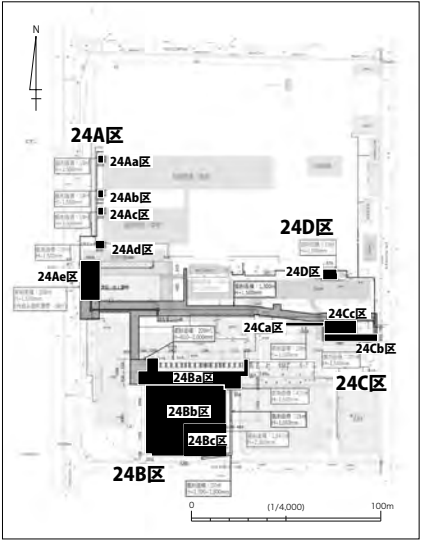
調査理由 明和高等学校校舎建築工事
調査期間 令和6年5月～11月
調査面積 2,470㎡
担当者 堀木真美子・川添 和暁



調査地点 (1/2.5万「名古屋北部」)

調査の経過 調査は、愛知県教育委員会財務施設課による校舎建築工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、令和6年5月から11月にかけて実施した。調査面積は計2,470㎡で、学校敷地内の北東エリアを24A区、南西エリアを24B区、東エリアを24C区、北東エリアを24D区とし、調査の都合上、24A区はa～eの5区に、24B区はa～cの3区に、24C区はa～cの3区に、さらに区分けして実施した。

立地と環境 西二葉町遺跡は、名古屋市東区白壁に位置する遺跡で、その範囲は、県立明和高等学校敷地から北東に鎮座する七尾天神社方面に広がる。当地は特別史跡名古屋城跡および名古屋城三の丸遺跡の東に位置しており、現地表の標高は 15.5m、名古屋台地が北側に向かって傾斜する崖ぎわ付近に立地している。『新修 名古屋市史 資料編 考古2』(平成 25 年刊行)によると、西二葉町遺跡は吉田富夫によって「古墳時代聚落址」とした二葉町遺跡



西二葉町遺跡 調査区位置図

令和6年度 西二葉町遺跡 調査区別概要一覧

区 面積	24Aa	24Ab	24Ac	24Ad	24Ae	24Ba	24Bb	24Bc	24C	24D
	10 m	10 m	10 m	10 m	250 m	1,957 m			240 m	33 m
戦後	グラウンド客土				愛知県立明和高等学校校舎基礎跡 (旧本館など) 愛知県第一高等女学校校舎基礎跡、					小道の造成
近代	整地層				瓦溜まり、整地層	名古屋帝国大学学生食堂舎基礎 ほか 愛知県第一中学校校舎跡 (柱跡、地下構造物)			愛知県第一中学校学校校舎基礎	
近世 後半	柱穴、 溝	柱穴、 溝	整地層、 常滑焼壺埋設遺構	柱穴、 溝、 井戸、 カマド跡、 整地層 (貝ブロック)	柱穴、 土坑、 溝、 井戸、 カマド跡、 整地層	柱穴、 土坑、 常滑焼壺埋設遺構、 整地層	柱穴、 土坑、 井戸、 整地層	柱穴、 土坑、 井戸、 常滑焼壺埋設遺構、 道状遺構、 整地層	柱列、耕作地	井戸？ 解体時堆積土 【家紋入り軒丸瓦、 犬山焼陶器など】
近世 前半						柱穴、 大型土坑 (貝層)、 井戸、整地層 【陶器、土師皿、焼塩壺、土人形、 銅製品、骨角器、 シカ骨などの動物遺存体】	柱穴、 大型土坑 (貝層)、 地下室、 整地層	溝・耕作地		
戦国期					区画溝	区画溝	区画溝	区画溝	土坑 【天目茶碗】	
中世						溝・耕作地	溝・耕作地	溝・耕作地		
古代	活動面 (竪穴建物跡か) 【須恵器・土師器】					【須恵器・土馬】			【灰釉陶器碗】	
古墳						【須恵器】				
備考					地山達せず				地山達せず	24Ca 区・ 24Cb 区 地山達せず

に当たるようである。これとは別に、明和高等学校敷地全体には成瀬隼人正中屋敷が所在していたことが以前から知られていた。

基本層序

遺跡の立地する地盤である熱田台地は、遺跡範囲の西側ないしは南側では地表下の浅いレベルでその表面に達し、北側ないしは東側に向かうに従って、緩やかに傾斜している。この熱田台地の傾斜に従って古墳時代・古代以降の活動痕跡が堆積層として形成されているため、遺跡範囲の北側ないしは東側では堆積層の状態が良好に残されている。一方、熱田台地で見えていくと、上位は黄褐色粘土層で下位になるに従って緑色の硬砂層へと変遷していくが、24B区の西側ではより浅いレベルでこの緑色の硬砂層を見ることができた。

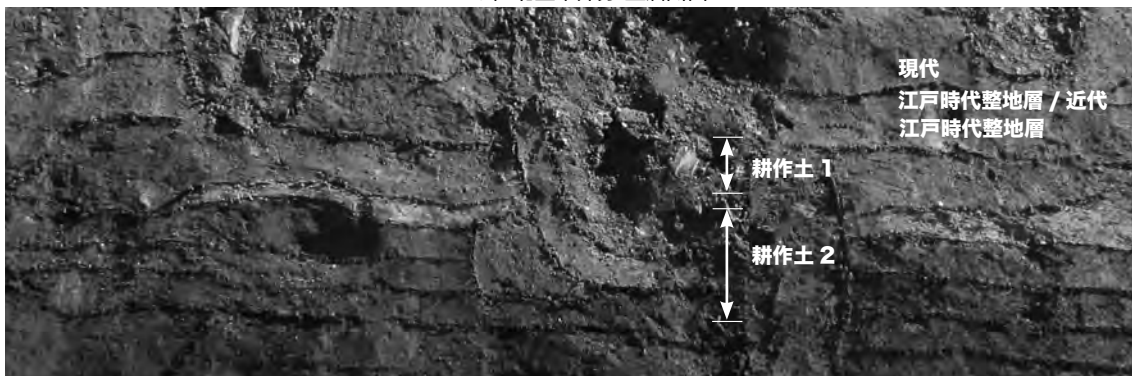
24B区をもとに基本層序を見ていく。近世の屋敷建物本体があったと推定される24Ba区北壁東側でみると、舗装下の碎石(30cm)下から、上からⅠ層：現代堆積層(20cm)、Ⅱ層：灰褐色硬砂層(10cm)【近代もしくは江戸時代堆積層】、Ⅲ層：褐色もしくは灰褐色砂層(60cm)【近世整地層】、Ⅳ層：灰色～黒色粘土層(20cm)【古墳時代～戦国期の耕作土・遺物包含層】、Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト・粘土層(10cm)【漸移層】、Ⅵ層：黄褐色粘土層(熱田台地)【地山】であり、Ⅲ層では3層の堆積が観察された。一方、屋敷建物外の敷地に当たると推定される24Bc区東壁ではⅢ層の下層が耕作土の状態を呈していた(写真下の耕作土1がこれに相当)。

調査の概要

調査区は遺跡範囲の各所に設定されているため、各調査区で確認された内容は個別に相違がある。全体の傾向は、15頁の下図にまとめておいた。やはり、調査区全体で広く確認できるのは、近世の成瀬隼人正中屋敷関連の遺構で、現在の明和高等学校が立地するような敷地全体が平坦な地形となったのは、明治初期の建物解体後から愛知県立第一中学校が建設されるまでの間と推定される。なお、古墳時代から古代の遺構・遺物が確認されたのは、24Aa区と24Ba区であった。



24Ba 区北壁東部分 土層断面



24Bc 区東壁 土層断面



24Aa 区 1156SX 【活動面：古代】（南より）



24Aa 区 1156SX 遺物出土状況（西より）



24Ae 区 柱穴群 【屋敷建物跡：近世】（南東より）



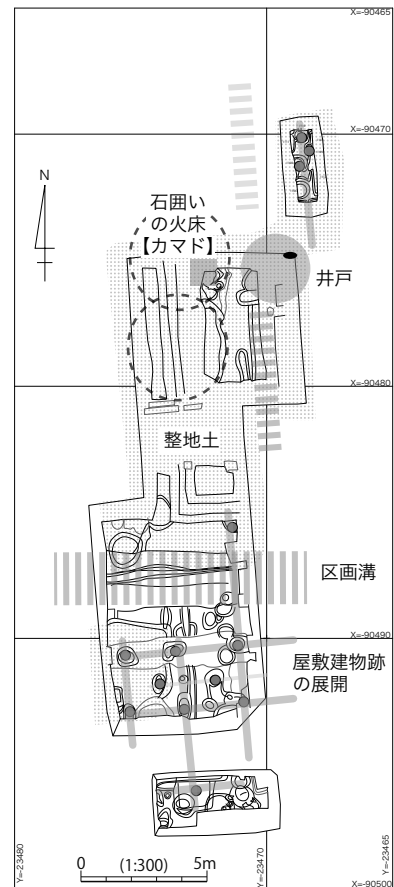
24Ae 区 1125SD 【溝：戦国期～近世初頭】（西より）



24Ae 区 1152SL 【カマド跡：近世】（東より）



24Ae 区 全体 【近世整地層下】（上が東）



24Ad 区・Ae 区全体図

2 4 A 区 北から24Aa区、24Ab区、24Ac区、24Ad区、24Ae区と、5箇所の調査区が離れて設定された。地表からの名古屋台地までの到達までが、24Ae区南端が50cmほどである一方、24Ae区北側では1m60cmほどと、調査区北側に向かうに従い名古屋台地の地形が傾斜している様子が窺える。この低位部分が旧来の遺跡の範囲として知られていたところである。

24Aa区は、最も北側に設定された調査区である。Ⅲ層の下では、近世の柱穴と溝、そしてⅣ層を埋土とする古代の遺構を確認した。遺構は東端しかとらえられておらず特定できないため活動面としているが、平面プランから竪穴建物跡の一部である可能性が考えられる。埋土中位のレベルで古代の土師器・須恵器が水平を保った状態で出土しており、竪穴建物跡であるならば、これが床面レベルになる可能性もある。

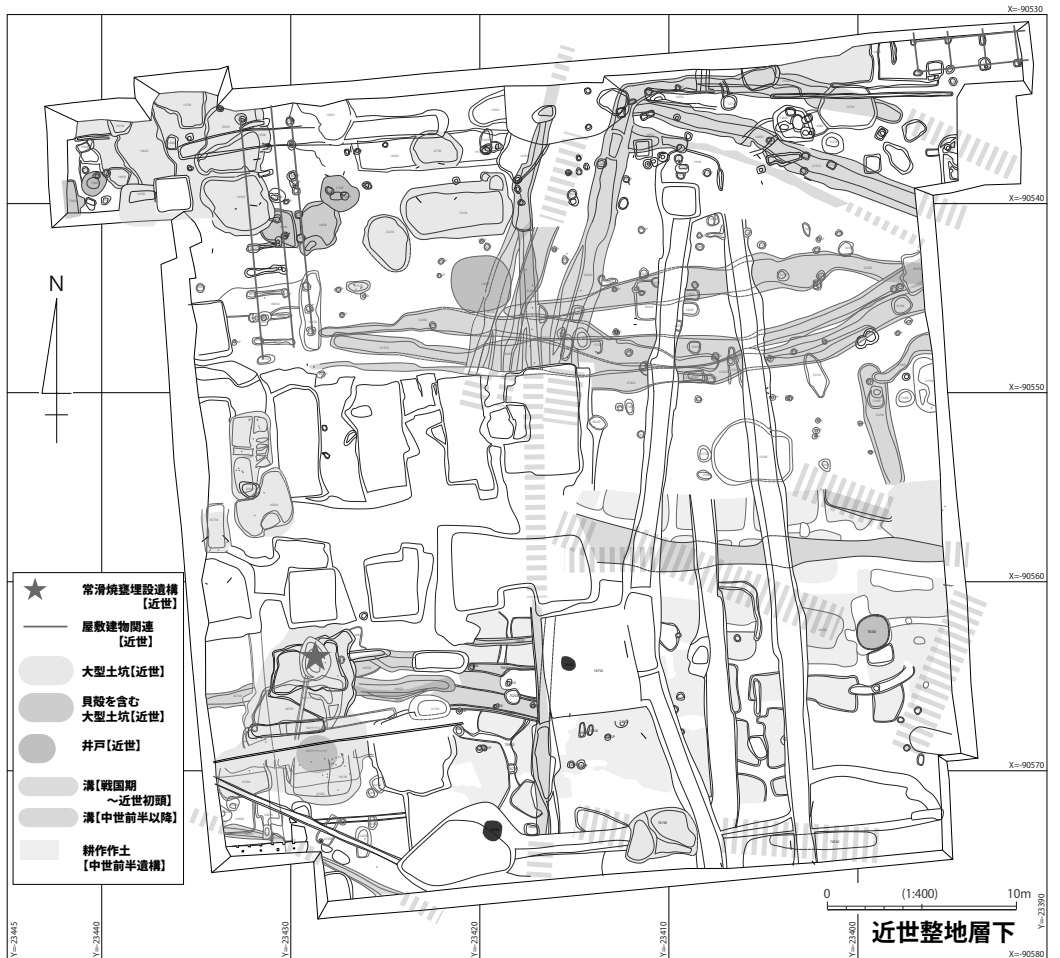
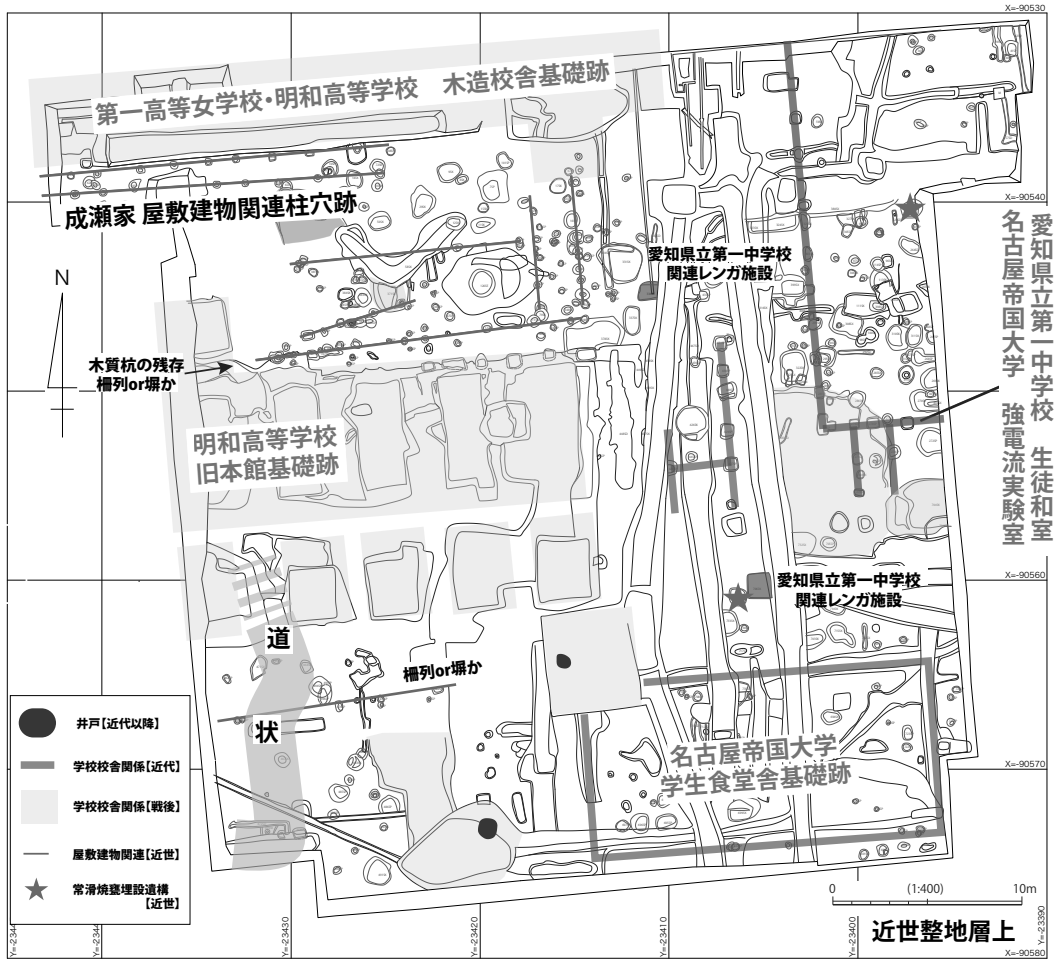
24Ab区では、Ⅲ層の下で、近世の柱穴と溝1条を調査した。柱穴は扁平な濃飛流紋岩河原石による根石（以下、根石とするものはすべてこの形状・石材のものである）を伴うもので屋敷建物関連の柱穴と考えられる。溝は断面形状箱掘りである。柱穴に先行するもので、屋敷建物前に存在していた区画溝の可能性もある。

24Ac区は、調査の制約上、Ⅲ層上面（近世整地層）で調査を終了せざるを得なかった。常滑焼甕の底部が正位の状態で出土した。これが埋設遺構であった可能性も考えられる。

24Ad区では、Ⅲ層の下で柱穴が4基確認された。このうち3基には根石があり、根石が抜かれた柱穴を含めて、直線的な柱列を形成するものもある。これらは屋敷建物に関係するものである。なお、この調査区では、Ⅳ層の形成は顕著ではなかった。

24Ae区は、24A区の中で最も広く設定された調査区である。Ⅰ層下でかつての明和高等学校校舎基礎に加えて、第一高等女学校校舎基礎跡の存在も確認できた。校舎は戦後すぐに立てられた木造校舎基礎である。これらの基礎は、Ⅱ層およびⅢ層の一部を掘りこむ形で埋設あるいは設置されていた。Ⅱ層を除去すると調査区南端のみⅥ層の基盤層である熱田台地に達した。ここで、愛知県立第一中学校校舎に葺かれた瓦が集積している土坑が見つかっているほかは、近代の遺構は希薄であった。Ⅵ層に達しなかった範囲ではⅢ層を検出した。調査区南東端では浅い土坑状の掘り方を呈する凹みに整地が行われていた様子が見られた。一方、調査区北側に向かって広くⅢ層が検出された範囲では、最深1mを越える整地層が確認された。整地層は灰褐色の砂層のほか、黒色粘土と熱田台地由来の黄褐色粘土、もしくは緑色の硬砂層との斑土で構成され、部分的にハマグリなどの貝層も検出した。調査区側では、根石をもつ柱穴によって構成される屋敷建物跡が確認されているが、この整地層中でも柱穴を確認することができている。この整地層の堆積している南際では断面箱掘り状の大きな溝が確認された。整地層は先行するこの溝を含めて、低位部分を平坦にするように築き、屋敷建物を構築したものと考えられる。調査区北端では径5m以上の掘り方を呈する遺構が重複して見つかっている。これらは焼土・炭化物を多く含むもので、径50cmほどの間隔で対になっている焼けた壁面が激しく重複する状態で見つかった。最下層では、板石を方形状に組んだ火床が見つかり、中から土師器鍋片がまとまって出土した。これらはカマド跡の可能性が考えられる。また、隣接する北東側では井戸の存在も確認されており、この一帯が炊事関係の場であった可能性が高いことが考えられる。

2 4 B 区 最も広い調査区で、上から（1）現代の客土直下【Ⅰ層もしくはⅡ層上面】、（2）江戸時代の整地層上面【Ⅲ層上面】、（3）江戸時代の整地層下面【Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層上面】の、三段階に分けて調査を実施した。



24B 区全体図（上：近世整地層上調査遺構、下：近世整地層下調査遺構）



24Ba区 全体【近世整地層上】(上が北)



24Bb区 全体【近世整地層下】(上が北)



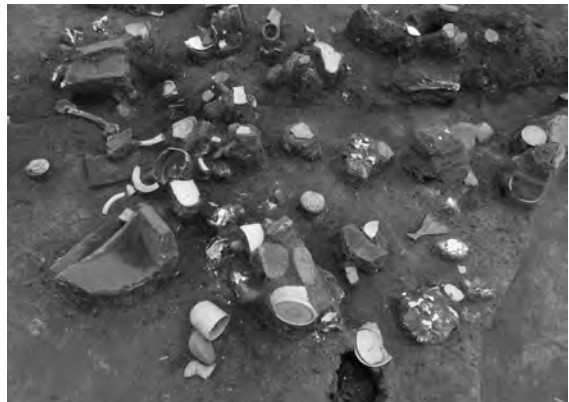
24Bb区 杭の残る柱穴列【近世】(西より)



24Bb区 383SK 焼塩壺【近世】(北より)



24Bb区 060SK 青銅杓子出土状況【近世】(南より)



24Bb区 060SK 遺物出土状況【近世】(南西より)



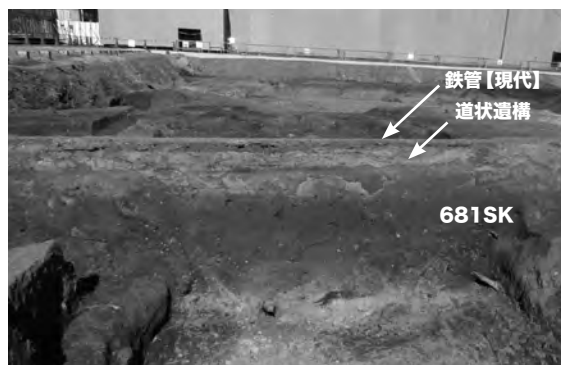
24Ba区 193SK 掘鉢出土状況【近世】(北東より)



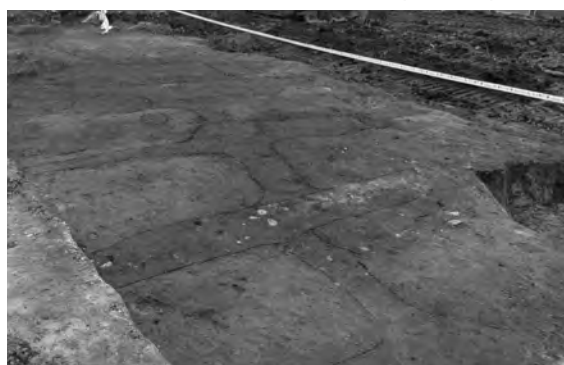
24Ba区 658SK 遺物出土状況【近世】(東より)



24Bb区 659SK【地下室：近世】(北西より)



24Bb区 道状遺構(上)、681SK(下) 土層断面(南より)



24Bc区 耕作土検出状況【近世】(北より)



24Bc区 名古屋帝国大学学生食堂舎基礎跡(北より)

(1)の段階では、近代から現代の学校校舎基礎などで、そのまま残存している状態のものを確認した。特筆すべきものに、名古屋帝国大学学生食堂舎の基礎が良好な状態で確認されたことである。

(2)の段階では、愛知一中時代の学校校舎建物跡のほか、江戸時代の成瀬隼人正中屋敷関連遺構【新しい段階】がまとまって調査された。前者には、平面プラン方形の柱穴跡と、一辺1mほどのレンガ積みの地下構造物がある。後者では、根石を有する柱穴列が、特に調査区北西端で良好な状態で確認された。また、根石を有さないものの杭自体が残存していた杭列も確認されている。この場所がこの調査面で確認される成瀬家屋敷建物本体の南端ではないかと推定される。また、調査区南西端では南北に延びる道状を呈する整地層とそれを跨ぐ形での柱列を確認している。屋敷へ通じる門などがあった可能性が考えられる。

(3)の段階は、成瀬隼人正中屋敷関連の遺構群【古い段階】に加え、戦国時代～江戸時代初頭の土地区画溝、さらには鎌倉・室町時代以降に営まれた水田・畑地などの耕作地跡が確認された。中屋敷関連の遺構群には掘立柱構造による屋敷建物跡のほか、大型土坑群とそれに関連する整地層、井戸などがある。大型土坑には掘り方の浅いものと著しく深いものがあり、24Bb区060SK・092SKのように貝層を含むものもあった。060SKからはシカ一頭分の四肢骨がとまって出土した。また、24Bb区659SKは階段が備わっていた地下室である。さらに、調査区南西端の道状遺構付近は、もともと大型土坑が埋められた整地土によって造成されており、その中心的土坑である24Bb区681SKは掘り方底面に達することができなかったことから、元来井戸であった可能性も考えられる。

戦国時代～江戸時代初頭の土地区画溝は、成瀬家屋敷関連遺構群とは軸線を異にする区画となって確認された。一辺20～30mに及ぶ方形区画が、北東-南西方向を軸として展開している。この区画に対応する柱穴なども確認はなされているものの、掘立柱建物跡の特

定に至るものは、現在のところ確認できていない。

中世以降の遺物を含む溝が、上記遺構群とはさらに軸線が異なる形で見つかった。東西方向に展開する溝がやや弧状を描く様子は、旧地形の等高線に沿っていた可能性がある。この溝に沿って、やや不定形な方形の区画を24Bb区南西側と24Bc区で検出した。土壌は攪拌されており、沈鉄を多く含むことから、かつては耕作地景観であったことが想定される。24B区におけるIV層はこのような攪拌された堆積層が主体となっていた。

24C区 24C区では、24Cc区のみが面的な調査が可能となった。昭和40年代以降の学校関係の工事のため、II層上面で愛知一中時の学校校舎基礎の跡を部分的に確認した。江戸時代の整地層（盛土：III層）を掘削すると、IV層・V層・VI層に達し、この面で戦国時代以前の建物跡のほか、耕作地（畑地）を確認した。この耕作土中からは灰釉陶器碗が出土したが、耕作地自体は中世前半以降と考えられる。

24D区 表土直下で戦後の道の跡があり、その下では、愛知一中時代の学校校舎建物基礎がとても良好な状態で確認された。さらに下には、江戸時代終わり頃の陶器・瓦を含む堆積層が見つかった。堆積層はしまりが緩く、明治初期の中屋敷解体時の廃棄層と想定される。この廃棄層から家紋入りの軒丸瓦と犬山焼小皿が出土した。

出土遺物 出土遺物には、古墳時代の須恵器杯身蓋・高杯脚部がある。古代では須恵器・土師器・灰釉陶器のほか、土馬が見つかった。土馬は24Ba区のIII層中からの出土である。中世前半では山茶碗片、戦国期では天目茶碗などの陶器片である。最も遺物が多いのは近世であり、各種陶器や土師器皿が多量に出土した。土師器皿の多くは灯明皿として使用された可能性が高い。焼塩壺も出土しているが、17世紀代が中心である。その他、土人形や、銭・杓子・煙管などの銅製品のほか、ヘアピンと考えられる骨角器も出土した。（川添和暁）



24Cc区 全景【近世整地層下】（南西より）



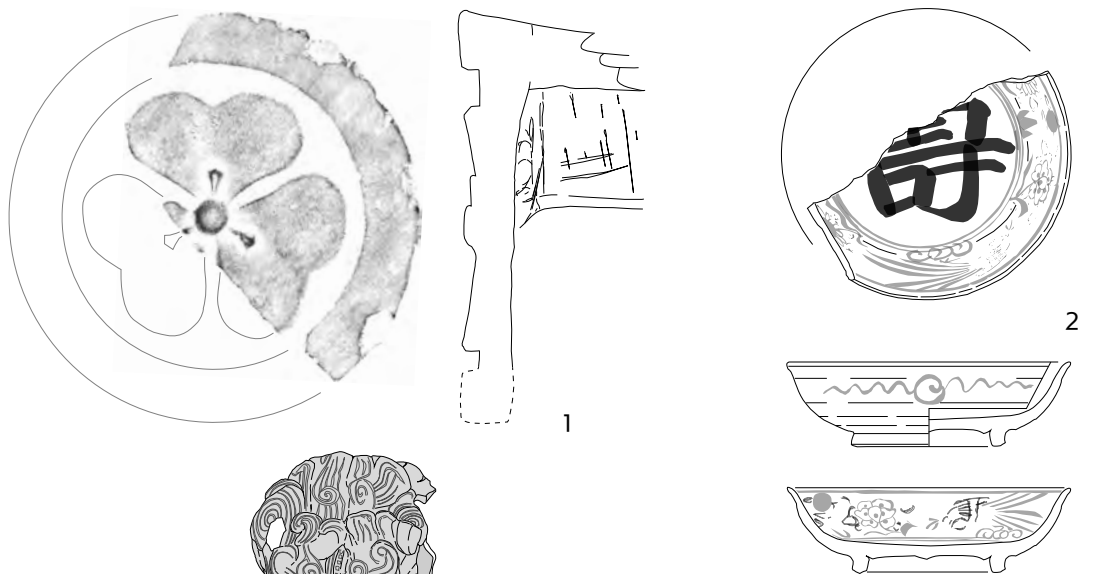
24Cc区 近世耕作土出土遺物【灰釉陶器：古代】



24D区 全景【愛知県第一中学校校舎基礎跡】（北西より）



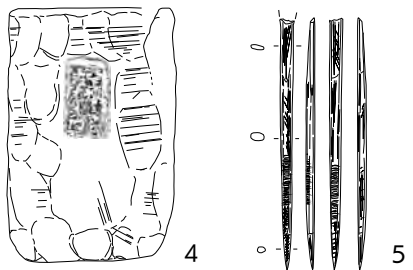
24D区 堆積層土層断面【近世末～近代初頭】



1・2：24D区出土、3～5：24B区出土



1：家紋入り軒丸瓦、2：犬山焼小皿
3：陶製狛犬、4：焼塩壺、5：骨製ヘアピン



①～⑦：焼塩壺
⑧：土馬
⑨：須恵器高杯



西二葉町遺跡出土遺物（4と④は同一資料）